

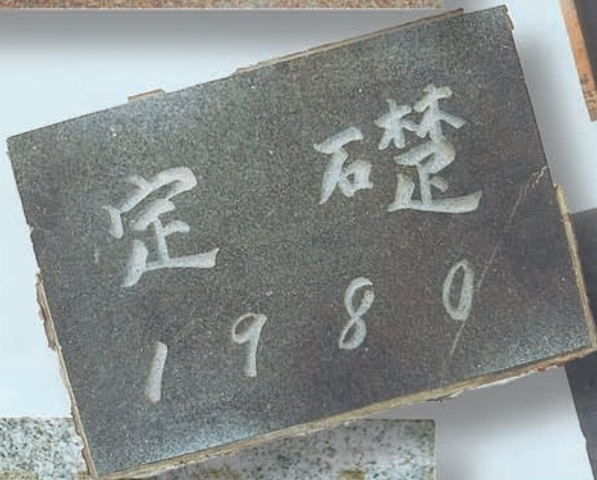
TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

# 東北学院資料室

LIGHT LIFE LOVE

Vol. 5

2005.12.31



東二番丁校舎・定礎

(左側上から)  
大体育館  
シュネーター記念館  
北校舎

(右側上から)  
文化部室棟  
礼拝堂  
科学教室棟



学校法人東北学院

# CONTENTS

ごあいさつ	東北学院長 倉松 功	1
『東北大学教授時代の鈴木義男』	仁昌寺 正一	2
東北学院中学・高等学校二番丁校舎お別れ会		8
大学祭〈工学部祭〉		12
〈泉キャンパス祭〉		13
〈六軒丁祭〉		14
〈学院祭〉		15
〈榴祭〉		15
〈幼稚園〉		15
第6回 ホームcomingデー『同窓祭』		16
— 同窓生と母校の絆を求めて —		
第3回 東北学院大学文化講演会		20
2005 (平成17) 年度時事		22
東北学院資料室規程		24
資料室来室・利用状況		25

## ラーハウザー記念東北学院礼拝堂内ステンドグラス

使徒言行録1章6節－11節より  
「使徒達に最後の祝福を与えて昇天する復活のキリスト」を描いている。英国製。

## 「東北学院資料室」第5号 発行にあたって

東北学院長 倉松 功



東北学院は2006(平成18)年5月、創立120周年を迎えます。1886(明治19)年に「仙台神学校」を創設、5年後には「東北学院」と改称され、今日の礎が創られました。

本東北学院資料室は、2001(平成13)年5月の創立記念日に開設され、今年で満5年を迎えます。その間、押川方義、W.E.ホーイ、D.B.シュネーダーの三校祖に足跡を常設展示し紹介するとともに、その歴史から多くを学び未来に引き継ごうとしております。平成15年から始まった「大正デモクラシーと東北学院」をテーマとした創立120周年記念事業も資料収集なども終わり、その成果を発表すべく準備を進めております。

その他、昨年は2月に大学産学連携推進センターと宮城県産業技術総合センターとのIT分野人材育成強化で連携、3月には二番丁校地・校舎お別れ礼拝、中学・高校の新校地(宮城野区小鶴)の登校日、7月には多賀城キャンパス工学基礎教育センター新築工事起工式(本年3月に献堂式をあげました)。昨秋には第6回ホームカミングデー(同窓祭)が多彩なプログラムで開催されました。

今回のホームカミングデーは、多くの同

窓生の要望に応じて卒業生全員にご案内を差し上げ、盛大に開催されました。また、「もっとゆっくり語り合いたい」その声に応じて、記念パーティーをホテルで開催し、会場の至る所で再会を喜ぶ笑顔が見受けられました。昨秋には3回目となる「東北学院大学文化講演会」が、青森市で同窓会青森県各支部の協力を得て開催され、百々幸雄氏(東北大学医学部教授・日本人類学会前会長)を講師に招き「縄文人のルーツと日本列島の人類史」と題した記念講演と「縄文人の交流と三内丸山遺跡」についてのパネルディスカッションが本学歴史学科の教員を中心に行われ好評を博しました。当日は、青森県での全県下同窓会総会が初めて企画され、各支部との連携を深めるなど教職員、同窓生、また地域の方々との強い絆をもつことができました。

東北学院資料室は、先人たちの熱い祈りとその献身犠牲により、今日の東北学院があることの歴史を将来に伝承し、また、「地の塩、世の光」としての活躍の足跡を収集・保存・展示してまいりたいと思っております。皆様方からの今後ますますのご理解とご支援をお願い申し上げます。

# 東北大学教授時代の 鈴木義男

東北学院大学経済学部 教授  
仁昌寺 正一



## 1. 東北大学法文学部教授への就任

1912(明治45)年に東北学院普通科を卒業した鈴木義男は、その後第二高等学校、東京帝国大学法学部に学び、やがて東京帝国大学助手勤務とヨーロッパ留学を経て、1924(大正13)年には東北帝国大学(以下東北大学)法文学部教授に就任し、新進気鋭の「花形教授」(鈴木義男伝記刊行会編『鈴木義男』、1964年12月、64頁)としてスタートする。しかし、それから六年後の1930(昭和5)年には辞職を余儀なくされる。本稿では、



鈴木義男

これまで必ずしもクリアでなかった辞職の理由を明確にすることに主眼を置きつつ、この六年間の鈴木氏の行動を追ってみることにする。

その前に、鈴木氏が東北大学法文学部教授に就任するまでの経緯をごく簡単にみておこう。

鈴木氏が東北大学法文学部教授に内定したのは、任期二年で勤務していた東京帝国大学助手の二年目の時であった。より具体的には、東北大学法文学部創立委員長・佐藤丑次郎(京都帝国大学教授)がスタッフの募集を開始した1921(大正10)年1月頃から、教授内定者として鈴木氏の名前が新聞に掲載された同年5月頃までの間であった(『河北新報』1921年5月25日参照)。この頃のことを、助手に採用された同期の河村又介は、

東北の法文学部創立委員長となられた京都大学教授の佐藤丑次郎博士が、教授の候補者選考のため東京に乗り込んで来られた。佐藤博士は鈴木君に会見するや、直ちにその人物に惚れこまれたらしい。法文学部の全科目を並べてみせて、どれでも好きな科目をよりどりしてくれと言われたと聞いている。鈴木君は毎年別々の学科を講義したいと答えた由である。鈴木君の自信と意気が誠によく現われる。しかしさしあたっては行政法担任ということになった

が、鈴木君は、従来のような注釈的又は形式論的な行政法の講義とは違うという主旨を現わすために、講座名を特に『行政法学論』とかいうことにしたいと申出て承認されたということであった。……こうして鈴木君は助手の任期二年が恐らくまだ終わらない中、文部省在外研究員としてヨーロッパに留学することとなった(前掲『鈴木義男』、51~52頁)。

と回顧している。

この後、この一文にもあるように、鈴木氏は、文部省在外研究員としてヨーロッパに留学している。留学期間は二年間であり、1923(大正12)年7月31日までであった。しかし、鈴木氏は、私費留学というかたちで留学期間を延長している。その理由は定かではないが、次の一文をみればある程度推測しうるであろう。

始めより予定したる独逸滞留十ヶ月の日も漸く残り少く相成申候。昨年伯林に入りたるは晩秋、木枯が往々チヤガルテンを襲ふの候に候ひき。生来の虚弱に加へて二、三の病を有する小生は、長途の疲れと伯林の寒気とに兎角健康勝れ不申候ひしも、つとめて大学の講筵に列し、図書館に通ひ申候。四月下旬、春光次第にラインに遍ねしと聞いて独逸国内巡歴の旅に出で、ハレー、イエナ、ワイマール、ウルツブルグ、スツットガルト、ハイデルベルク、フランクフルト・アム・マインを歴遊し、ラインに沿ひてケヨルンに出で、ボンを訪ひ、ゲッチンゲンに遊び申候。爾来滞留の大部を旅行に費し申候が、そは一には小生の旅行好きにも依る事に候も、一には吾人が欧米に派遣せらるる使命の一半には、親しく各国の国情を視察して将来の研究に資に供すべきこと、殊に大戦後の今日に於てその意義あるべきことを信じたるに依るにて候。(鈴木義男「独逸より(一)」『思想』24号、岩波書店、1923年9月、78頁)

これは鈴木氏が留学中に日本に送付した論文の書き出し部分であるが、ここから「各国の国情を視察して将来の研究に資に供すべき」ために、「独逸国内巡歴」はむろんのこと、「欧米」の視察までも行おうとする鈴木氏の強い姿勢をみてとることができよう。つまり、このような飽くなき研究姿勢こそ、私費を投じてまでも留学期間を延長した主な理由と考えられるのである。

なお、鈴木氏は、この留学中に、東北学院専門部校舎

の建設資金募集のため帰米していたシュネーダー院長の自宅（ペンシルバニア州ランカスター）も訪問している（『東北学院七十年史』、425頁）。

かくして、留学の延長期間が八ヶ月間にもおよび、



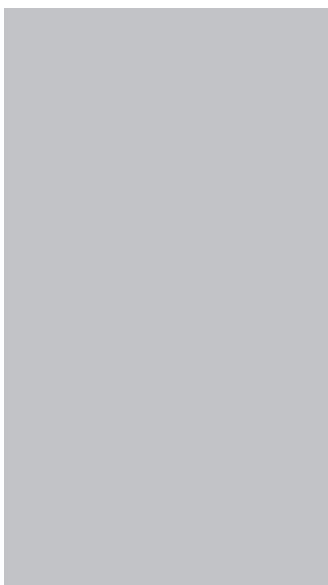
東北大学教授時代の鈴木義男（東北大学資料館提供）

帰国したのは東北大学の新年度の授業開始直前の1924年3月25日であった。そして3月28日、文部省より東北大学法文学部教授としての辞令を交付されている。つまり、この日、正式に東北大学法文学部教授となったのである。

## 2. 現役将校の学校配属に対する批判

鈴木義男の東北大学法文学部教授としてのスタートは順調であった。何よりも、三年二カ月にもおよぶ長期の海外留学の体験を交えた講義が学生たちに好評であった。鈴木は行政法学の講義を聴講した村教三（1927年卒）によれば、「鈴木義男先生が東北大学教授として初めて講壇に立たれたのは、大正13年4月で、その時お歳は29歳（30歳の誤り……仁昌寺）であった。欧米新帰朝の嶄新な知識を、雄弁と機智につつんで講義されたので、学生はすっかり魅了された。教場はいつも学生であふれ、先生の周囲を鈴木ファンがとりまいていた」（前掲『鈴木義男』、70頁）という。

しかし、間もなく鈴木は、当時の国家の重点的な



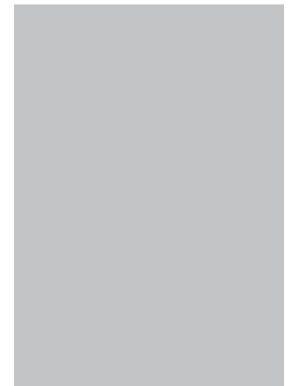
『河北新報』大正13年12月8日から引用

政策を批判したため窮境に陥っていく。その政策とは、1922（大正11）年2月に締結したワシントン軍縮条約——周知のように、海軍の主力艦数をアメリカ10、イギリス10、日本6という比率に決定——への対応として、軍備縮小を軍事教育強化でカバーして軍事体制を維持すべく中等学校以上の男子の学校に現役将校を配

属し兵式訓練を行わせようとするものであった。これに対して、鈴木は真っ向から立ち向かった。

1924年12月7日、まず鈴木は、東北大学の学生を中心に結成されていた「仙台軍事教育学生反対同盟」主催の集会において、これらの学生の要請に応じたかたちで同政策への反対演説を行った（『河北新報』1924年12月6日、12月8日）。そして次に1924年12月8日から7回にわたって『河北新報』に「所謂軍事教育批判」と題する論文を連載した。それは、「軍事教育を全国の学校に大規模に行うこと」は「青少年の心に知らず知らず戦争の本能を植え付け激発して戦争を好ましむるに至ること」であり、したがって「次代の国民の精神に及ぼす大なる悪影響」である、とか、現役将校の「進退の鍵を陸軍大臣が握っている以上、現役将校は学校にあっては校長の監督権に対しては治外法権にも等しく地位の保証を有するものである」とか、陸軍のねらいは「軍縮に依る将校を一方に於て維持し、他方国民教育を軍国主義化せんとする、一弾を以て二鳥を射んとする巧妙な政策である」といった主張からも明らかなように、この政策の核心を衝くものであった。

それだけに、軍部も黙視するわけにはいかなかった。ただちに「某陸軍少将」が「鈴木氏の軍教批判の批判」を、12月18日と19日の二日にわたって『河北新報』に発表した。いうまでもなく、この政策の遂行を正当化しようとするものであった。参



『河北新報』大正13年12月18日から引用

考までに、その内容を摘記しておく、「大学教授の地位にある人の議論として或は純真な青少年の心理に誤解と謬想を持たしむる憂いなき保し難いことを想うて黙し難く敢て批判を試みる」。すなわち、①日本国民たる立場を離れた理想論である、②学者と教育者とを混同して議論している、③軍人は好戦的な者ばかりではない、④亡国意識は相当進んでいる、⑤軍事教育を行う目的は、軍国主義化を進めようとするものではなく、国民の尚武心を涵養するものである、⑥軍事教育を学校教育に加えようとするのは国民皆兵主義を徹底させようとするからにはほかならない、⑦軍隊の階級制度は兵員に職責を教えるための一時の区分にすぎず、このために生徒の向上心を害するものではない、⑧軍事教育にも科学的兵器を以てする教育を加えることが緊要となっている、⑨現役将校の学校への配属は、「帝国の現況に鑑み学校の軍事予後教育をして一層の効果あらしめんとならばこの方法以上の方策はない」。

このような激しい応酬があったものの、結局、翌1925(大正14)年4月13日に文部・陸軍省令として「陸軍現役将校学校配属令施行規程」が公布され、5月からこの政策が実施されることになった。ちなみに、東北学院でも、他の基督教主義の学校にならって現役将校の居室が設けられ兵式教練が行われている。

そして、これに伴い、この政策を公然と批判した

鈴木  
の立場が危うくな  
っていったことはいう  
までもない。それを裏  
付けるかのように、  
1926(大正15)年9月  
に文部省が作成した  
「左傾教授」のリストに  
は鈴木義男の名前が載  
っていた。それによれば、  
鈴木は、「西瓜」の  
ように「外観は青いが、  
中身は赤い」とされて  
いた(『河北新報』1926  
年9月20日)。思想的  
にはマルキシズムでは  
ないが、反体制行動で  
は過激であるというの  
であろう。

『河北新報』大正15年9月21日から引用

### 3. 衆議院選挙で社会民衆党の赤松克麿を 応援(1928年2月)

鈴木義男は、1928(昭和3)年2月の第一回普通選挙で、宮城一区に社会民衆党から立候補した吉野作造の娘婿(次女の夫)である赤松克麿を応援した。その動機は、新聞には「大学時代からの友誼に基くことは勿論、政見的にも社会民衆党の主義、政策に共鳴するところが多いから」(『河北新報』1928年2月11日)と語られていた。

しかし、鈴木と赤松との関係についていえば、かつて東京帝国大学の「新人会」を立ち上げた仲間ではあったものの、それ以降においては行動を共にすることはなく(中村勝範『帝大新人会研究』、慶応義塾大学出版会、1997年5月、19頁参照)、それゆえ「友誼」に基づく応援ということはまず考えられない。やはり、主な動機は吉野作造との師弟関係からであったと思われる。実際、鈴木は後年、「現職の教授が政党の応援演説をやるのは不謹慎ですが、これは、吉野先生から頼まれてやったのです」(「第5回吉野記念会」での鈴木義男の発言、同記念会速記録〔1952年4月13日〕より)と述べている。

2月1日公示で2月20日が投票日であったこの選

挙期間中、吉野は赤松の応援のために、1月31日～2月1日、2月12日、2月17日～19日の三度、宮城県を訪れているが、この時の彼の日記をみると、鈴木とは選挙以外のことでも親しく接している様子がかがえる。例えば、2月1日には「快晴、朝起きると鈴木義男河村又介両君の来訪をうく 鈴木君に案内されて書籍館に池田館長を訪ひ日本行紀を見してもらう」(『吉野作造選集15 日記三〔昭和2-7〕』、59頁)とか、また2月17日には「朝仙台に着く 気分よろしからず 三十八度に上る 日中は床上に横はり午後一寸帝大に鈴木君を訪ねて見る」(同上、65頁)といったようにである。このような関係が続いていたからこそ、鈴木は、吉野の要請に応じて、河村又介、堀経夫、新明正道を加えた四教授で組織された「応援団」の団長的役割を担うほど積極的な応援をすることになったのである。

さて、鈴木を中心とする東北大学教授グループが赤松克麿の選挙の応援に乗り出したのは選挙中盤の2月10日からであった。翌日の『河北新報』は、この動きを「赤松氏の為に教授の応援団が組織せられた」という見出しで報道している。これ以降、2月19日の『河北新報』が「東北大学教授鈴木、河村、堀の三教授はその後依然渾身の熱情をかたむけつくして友人赤松克麿氏のために連日連夜転戦」と報道しているように、応援演説で宮城一区内を駆け巡ったのである。それに対する反応は極めてよく、「応援の諸教授の熱弁は聴衆に少ななからぬ感動を与え」(『河北新報』1928年2月15日)たと報道された。

応援活動は、演説という方法ではなかった。この時もまた、鈴木は新聞を利用している。すなわち、「普選の側面観察 重要な意義を持つ権利行使の態度」という論文を、『河北新報』に2月19日と20日の二回にわたって発表したのである。この中で「輸入

候補」に対して「偏狭な郷土観念によるやうなことを希望したい」と述べ、遠回しにはあるが、赤松への投票を呼びかけている。

結果的には、このような活動も奏功せず、赤松は落選した。とはいえ、鈴木義男は、吉野作造の恩義には十

『河北新報』昭和3年2月19日から引用

分報いたといえる。

#### 4. 辞職の圧力と同僚の擁護 (1928年4月)

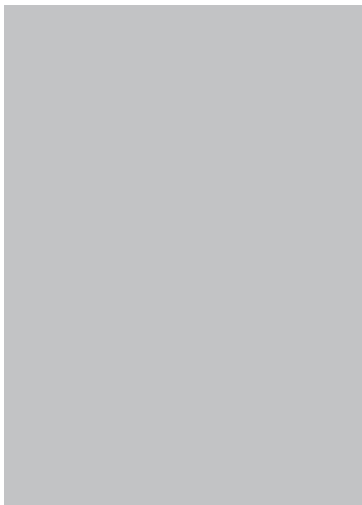
この選挙の直後から田中義一内閣によって露骨な思想弾圧・統制が行われるようになったことは周知の通りである。それは、3月に共産党などへの大弾圧(いわゆる「3・15事件」)が行われたあと、4月には大学の「赤化教授」追放へと向かっていた。そして4月20日頃までに、京都帝国大学では河上肇、東京帝国大学では大森義太郎、九州帝国大学では三名が、各大学の総長による辞職勧告を受け入れるかたちで辞職を余儀なくされていた。

東北大学の場合には、4月17日に、小川総長が、鈴木義男、河村又介、服部英太郎、宇野弘蔵、堀経夫、新明正道の六名を総長室に呼び出している(『河北新報』1928年4月18日)。むろん、政府が彼らを「赤化教授」か、あるいはそれに近い教授としてマークしていたことを受けてであった。ただし、このときの小川総長の対応は、他の大学の場合とは異なって、強引に辞職を迫ったりするようなものではなかった。そのことは、後に鈴木が、

私は、小川総長に呼ばれたのですが、そのとき総長は巻紙をもっており、その巻紙には、私、河村、堀ほか三名ほど名前が書いてあった。そして総長の曰く、「君はきげんではないだろうな」と。私は、「まあ、桃色くらいでしょう。」と答えた。結局、小川総長は、当時の九大の総長と違って、休職、免職の勧告をしませんでした(『第5回吉野記念会』での鈴木義男の発言、同記念会速記録[1952年4月13日]より)

と述べていることからわかる。

ところで、鈴木については、1928年4月21日の『河北新報』が「罷免の噂さる鈴木義男教授」という見出しで「連日いつれかの新聞にその退職決定の旨が伝えられる」と報じたように、退職の「噂」が広まっていた。



『河北新報』昭和3年4月21日から引用

ちなみに、このような「噂」が立ったのは六名の中では鈴木のみであったから、六名の「赤化教授」の「本命」が鈴木とみなされていたといえる。しかしながら、このことに関して注目しておきたいのは、小川総長をはじめ

めとして、東北大学法文学部の同僚がこぞって鈴木を擁護する立場に立っていたことである。例えば、某教授は「鈴木君がマルキストでないことは多少とも学界の現状に通ずるものならば簡単に判別し得るところで、同君の罷免についてはこれこそ何等合理的基礎のないことは明瞭で、若しこの様な噂が具体化して行く様なことがあれば、我々同僚は勿論結束して同君のために立つ」と言い、阿部次郎——『三太郎の日記』で有名——に至っては「その事は僕が責任を以て明言するが、その様な馬鹿な事は絶対にない」とまで言っている(『河北新報』同上)。鈴木は職場の同僚達から深く信頼されていたのである。

このように、「上から」の圧力があつたにもかかわらず、同僚の多くが鈴木を擁護したこともあって、この段階では鈴木を辞職させることはできなかったのである。



前列中央(前掲『鈴木義男』より)

#### 5. 「不本意な出版事件」

この後に出てきたのが、「不本意な出版事件」(『宮城県百科事典』の鈴木義男の項)と呼ばれるものである。このことについては、前掲『鈴木義男』でも数名が言及しているが、それらの中では佐藤寅夫(鈴木の子東北学院普通科の一年後輩)の以下の記述が最も真相に近いのではないと思われる。

鈴木サンは独逸に留学し、東北大学の助教授(教授の間違い……仁昌寺)として赴任した。勿論法文科を担当した。たまたま学院から政治学の講義を依頼されたが自分は専門ではないからと辞退した。然し母校のこともあるので畏友臘山先生の諒解を得て講義用に簡便に抜萃し非売品として印刷したところ、或る書店でこれを市販した。時を同じくして学校配属将校の問題があり、「軍部は一矢をもって二兎を射る」ものなりと新聞で論じたところ軍部から睨まれ、あれやこれやアラさがしをされたところ、前の書籍問題が出て来た。相当軍部の圧力があつたことと思う。鈴木サンは敢然教授を辞して状況し弁護士開業をしたのである(前掲『鈴木義男』、1964年12月、26頁)。

この文中で語られているいくつかのことを確かめてみることにしよう。

まず、「学院(東北学院……仁昌寺)から政治学の講義を依頼された」ということについて。このことについては、『東北学院七十年史』の1925(大正14)年度の

東北学院専門部の「兼任教授」の箇所(458—460頁)に、「政治学 東北帝国大学教授 法学士 鈴木義男」とあり、同年度から非常勤講師として政治学の講義を行っていたことを確認できる。

次に、「講義用に……非売品として印刷した」ということについて。このことについては、そのような印刷物が、前掲『鈴木義男』の巻末にある「鈴木義男著作論文一覧表」にも掲載されておらず、果たして存在するのか否かいわば半信半疑であったが、東北学院大学中央図書館で探したところ、表紙に『法学士鈴木義男述 政治学講義案 仙台 金港堂発行』と書かれている印刷物が出て来た。これが「不本意な出版事件」の原因となったものに間違いなからう。

次に、「非売品として印刷したところ、或る書店でこれを市販した」ということについて。実は、「不本意な出版事件」とはこのことにほかならない。この印刷物中の序文(以下の文)をみると、鈴木がこの印刷物を公刊する意志がなかったことがわかる。

本講義案は本年余が東北学院専門部の嘱に依じて講じたる政治学の要領である。政治学はもとより余の専攻する行政学及行政法学の前提をなす学であるが、余の専攻する所ではない。加ふるに研究甚だ未熟であって公刊して世に問うべきものではない。只学生筆記の労と説明の時間とを節せんがために印刷に付するものである。

余の見る所を以てすれば国家学、国法学等に独立の地位を与ふれば政治学に於ては政治現象を説明するを以て足ると考ふるのである。併乍ら学生に授くるものとしては社会科学たる政治学を如何に取扱ふべきかと云うことを教えて方法論に一通りの理解を得せしむることが肝要と考へ、政治学方法論に就て比較的詳細の説明を試みた次第である。

政治学研究の興味に就ては、余は東京帝国大学研究室時代より畏友臘山政道学士に負ふ所が特に多い。その方法論及政治学の対象等に於て所見を一にする所甚だ多く、その数多き述作より豊かなる教示を得たことを感謝するものである。又法文学部長左藤博士は本講義を進むるに当って随時有益なる指導を垂れられた。こゝに記して深き感謝の意を表する次第である。

大正十五年三月

すなわち、「研究甚だ未熟であって公刊して世に問うべきものではない。只学生筆記の労と説明の時間とを節せんがために印刷に付するものである」としているのである。ところが、実際には、この印刷物は鈴木の意志とは別に公刊されてしまった。つまり市販されたのである。作成過程で何らかの手違いがあったものと思われるが、それはともかく、このようなことが問題視され攻撃されたと考えて差し支えなからう。

これが、鈴木にダメージを与えようとする「軍部」などが、「アラさがし」をして飛びついた事件である。



鈴木義男が東北学院専門部で使用した政治学のテキストとその序文(東北学院大学中央図書館所蔵)

すでに軍国主義の勢力はかつてとは比較できないほど大きくなっており、鈴木「中杉山通の宅には所謂角袖と称する特高の刑事や憲兵隊員が折々監視していた」(前掲『鈴木義男』、232頁)という状況となっていたのである。

ところで、こうしたなか、鈴木が東北大学を辞職することを決めたのはいつ頃だったのだろうか。この点に関する資料がないので定かではないが、吉野作造の日記がなにがしかの参考となるであろう。1929(昭和4)年11月1日には

門側に東北帝大の鈴木義男君を見る 研究室に伴つて近況をきく(吉野作造選集15『日記三〔昭和2—7〕』162頁)

と書かれている。この文章からうかがえるように、鈴木「の訪問はやや唐突な感じがする。そうであるだけにこの頃、東北大学を辞職する方向に傾いていた可能性も否定できない。

この後、鈴木は、1930年(昭和5)年3月29日(土)に、吉野作造の家を訪問している。当日の吉野の日記には、

夜鈴木義男君来訪 数時間懇談す 例の事件につき頗る河村君に含む所あるものの如し 四月一日附にて辞表を出し直に聴許になる筈なりと云ふ 先き先きは東京にて弁護士をやる考らし 差当り生活にも困らしい話なり(同上、180頁)

と記されている。「例の事件」とは、「不本意な出版事件」のことであろう。そして、この中に書かれている通り、4月1日には東北大学に辞表を提出したのであろう。5月14日には、文部省から辞職を認可されている(『東北大学法文学部略史』、1953年3月、63頁)。辞職の名目上の理由は「病気」であったという。

## 6. おわりに

以上、今回は、鈴木義男が1930年に東北大学教授を辞任した理由を探りつつ、彼が同大学教授として仙台で過ごした六年間を追ってみた。鈴木は思想的には共産主義者・マルクス主義者ではなかったけれども、反体制的行動ではそれら以上に過激であった。



それゆえ、軍国主義化を強めつつある時代にあつては、共産主義者・マルクス主義者と同じく、あるいはそれ以上に「危険」な人物とされたのである。その意味では、やはり、鈴木自身が言うように、「危険思想の故をもって東北大学をやめ」（『今村力三郎翁追想録』、専修大学、1955年、294頁）たのである。かくして、この後、鈴木は活動の舞台を東京に移すことになる。

なお、鈴木義男は、東北大学教授時代、仙台市の五橋メソジスト教会に通っていたという（前掲『鈴木義男』、250頁）。そこで、過日、同教会の関係者に鈴木に関する資料が残っていないかを尋ねたところ、残念ながら、1945年2月10日未明の「仙台空襲」——市街地の三分の一が灰じんに帰した——によって同教会が全焼したため、全く残されていないということであった。

## 鈴木義男略歴

1894（明治27）年 0歳	1月27日に、福島県白河町（現白河市）大字田町77番地で生まれる。父・義一、母・イエの6番目の子供で、三男であった（※長男は日露戦争で戦死、次男は1歳で死亡）。
1907（明治40）年 13歳	3月に白河町尋常小学校を卒業し、4月に東北学院普通科（中学）に入学。
1912（明治45）年 18歳	3月に東北学院普通科を卒業し、7月に第二高等学校（一部甲類）入学。
1916（大正5）年 22歳	7月に第二高等学校を卒業し、9月に東京帝国大学法学部法律学科（英法研究）入学。
1918（大正7）年 24歳	5月20日、鉄本ときわ（宮城県玉造郡一栗村鉄本文吉三女）と結婚。
1919（大正8）年 25歳	7月に東京帝国大学を卒業し、9月に東京帝国大学法学部助手に採用される（※助手は、1921（大正10）年7月29日まで）。
1921（大正10）年 27歳	7月30日より文部省在外研究員として独・仏・伊・英・米に留学。8ヶ月私費延長して1924（大正13）年3月25日に帰朝。
1924（大正13）年 30歳	3月28日に東北帝国大学文学部教授に任ぜられる。4月に行政法学講座担任、5月に特別講義法学概論兼任となる。
1930（昭和5）年 36歳	4月1日に辞職願いを提出し、5月14日に認められる。5月15日に東京地方裁判所に弁護士登録。弁護士事務所は九段一口坂。
1934（昭和9）年 40歳	4月から法政大学教授として行政法・英法を講義（※弁護士活動も継続）。
1940（昭和15）年 46歳	3月に法政大学教授を辞す。
1945（昭和20）年 51歳	11月に日本社会党に入党。
1946（昭和21）年 52歳	4月の総選挙で衆議院議員に福島二区から立候補し当選（1回目）。社会党中央執行委員となる。
1947（昭和22）年 53歳	4月の第23回総選挙で衆議院議員に当選（2回目）。6月に片山哲内閣の司法大臣に就任。また、7月には東北学院第6代理事長に就任。
1948（昭和23）年 54歳	3月10日に芦田均内閣の法務総裁（国務大臣）に就任。（※司法大臣は1948（昭和23）年2月15日、「法務庁設置に伴う法令に関する法律」〔昭和22年法律195号〕により消滅）。10月15日に国務大臣を退官。
1949（昭和24）年 55歳	1月の第24回総選挙で衆議院議員に当選（3回目）。
1951（昭和26）年 57歳	3月に専修大学教授となる（※後に専修大学学長、専修大学理事長に就任）。
1952（昭和27）年 58歳	10月の第25回総選挙で衆議院議員に当選（4回目）。
1953（昭和28）年 59歳	4月の第26回総選挙で衆議院議員に当選（5回目）。
1954（昭和29）年 60歳	1月に同志社大学より法学博士の学位を授与される。
1955（昭和30）年 61歳	2月の第27回総選挙で衆議院議員に当選（6回目）。
1958（昭和33）年 64歳	4月の第28回総選挙で落選。
1959（昭和34）年 65歳	4月より青山学院大学教授となる（行政法学を講義）。
1960（昭和35）年 66歳	1月に民社党の結党に参加。10月の第29回総選挙で衆議院議員に当選（7回目）。
1962（昭和37）年 68歳	11月に青山学院大学構内にて講義を終えた後倒れ、慶應病院入院。
1963（昭和38）年 69歳	8月25日午前11時29分、聖路加病院にて死去。8月31日に青山学院大学礼拝堂において葬儀。

著者 仁昌寺 正一プロフィール NISHOJI, Shoichi

1950（昭和25）年生まれ  
東北学院大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学  
東北学院大学経済学部助手・講師・助教授を経て現職  
「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会委員

# 東北学院中学・高等学校二番丁校舎お別れ会

## ～一世紀の歴史をありがとう～

同窓生を対象とした「東北学院中学・高校二番丁校舎お別れ会～一世紀の歴史をありがとう～」が、2005(平成17)年3月19日午後1時から東北学院中学・高校二番丁校舎の礼拝堂で盛大に開催され、在学当時を懐かしむ同窓生や本学関係者ら約330人余が出席。

会はお別れ礼拝とお別れ式の二部構成で実施され、以下の記事は「お別れ礼拝」の司式にたった田口誠一先生(元理事長・学院長、元中学・高等学校長)のあいさつと「お別れ式」で「お別れの言葉」と題した田口先生の二番丁校舎の惜別の講話から要旨を掲載。

### お別れ礼拝

元校長 田口 誠一先生



ただいまより、東北学院中学・高等学校二番丁校舎お別れ会を開始させていただきます。

賛美歌234番のAを歌いましょう。

聖書を拝読いたします。新約聖書コリントの信徒への手紙第10章13節です。

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」

最初に申し上げたいことは、この礼拝堂は月浦利雄先生の形見とっております。月浦先生は戦後、校長になり、中学・高校は1年生から6年生まで、全員そろって礼拝をするということで礼拝堂をつくるには、心血を注いであたられました。当時からちょうど40年になります。私はここに立ちますと、そんなに時間がたったかなと思います。ここに生徒諸

君が制服を着て立ちますと、さすがは東北学院中学・高校だという思いで立ったものであります。

いま私がお読みしましたところは、昭和44年の正月か1月22日に月浦先生がお読みしたところです。これは先生が「私は小学校の5年のときに父親を亡くし、それから、中学校の3年のときに母を亡くし」、それ以来この聖書の言葉に、どれだけ励まされてきたかわかりません。「神様は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず」、さらに「試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」、こういうことであります。おそらく、あの朝の礼拝のお話のなかに、先生はご自身のことを加えてお話になりました。

東北学院は来年創立120年を迎えます。この地に、いまは新制中学校、戦争の末期には中学校、それ以前は中学部、それ以前は普通科とも言われた時代の変遷があります。ここに、新しい校舎がつくられたのは明治38年、当時は普通科の赤レンガの校舎が建てられました。それ以来数えると、ちょうど100年になります。以来、約8,800人の生徒たちが、ここを巣立ちました。その間、日々の学校教育において、学校の関係者はどれほどご苦勞をされたかと。それははかり知ることができません。

ここで中心になったのは、D. B. シュネーダー先生です。アメリカのミッションから、少なからずの応援はあったと思いますが、先生のご苦勞はどれだけあったか分かりません。

この「コリントの信徒への手紙」の言葉は、この普通科、中学部、あるいは戦後の新制高校において、そのような100年にわたる日々のご苦勞に合わせまして、忘れることができないのであります。

私が、その後のことで大きく取り上げたい年は、昭和17年の年です。この頃は、東北学院の専門部は



文化系の学校ですから、学校の特典は取り上げられ、兵役延期の特典がなく、揚げ句には「もう閉じてしまえ」と言われた時代であります。

辛うじて東北学院を残すことができたのは、同窓生の萱場四郎先輩が、仙台でジャイロスコープという飛行機をつくり、その方の応援とご指図を受けて、昭和19年に東北学院航空工業専門学校をつくることができました。これは、どれだけのご苦労だったかわかりません。キリスト教学校として存続すること自体が大変な問題でありました。

それから、赤レンガの建物正面、バルコニーの上には、「LIFE LIGHT LOVE」という、三つの単語が掲げてありました。これはシュネーダー先生が二代目の赤レンガを建てられたときに掲げられたものがあります。『河北新報』には、「敵性国家の言葉が街の真ん中に堂々と掲げられてある。けしからん」と新聞の投書があり、県の担当が聞きつけて、その「LIFE LIGHT LOVE」を塗りつぶしてしまったことです。

ですから、東北学院が戦後まで生き延びることができたことは、やはり神のご恩寵、お助けがあったということ。併せて学校関係者、あるいは同窓生の方々すべて、この聖書の言葉に基づいて生きる道を、あるいは逃れる道を与えられたと思うのです。

東北学院をご卒業の皆さんは、もしも東北学院に学ばなかったとしたならば、現在の私たち自身はこのようなかたちでは存在しないであろう。これは事実であります。神様はすべてを計画のなかに入れて、そして導いてくださります。必ず神様は、私たちのために良き道をお備えくださります。これは信仰の一つでありましょう。その意味で、日々聖書に親しんでいきたいと、このように思うのであります。

## お別れの言葉

田口 誠一先生

東北学院三校祖。これは押川方義先生、W.E.ホー

イ先生、D.B.シュネーダー先生であります。この三校祖につきまして、『東北学院七十年史』の主筆であられました花輪庄三郎先生のお言葉によって、これをご説明します。

「気迫の押川、熱情のホーイ、クオールに誠実、恪勤のシュネーダーを得たことは、東北学院の百年の体系の上に偉大な結果をもたらすことになる」

これは、在校生諸君もいくたびか聴いており、よく知っているはずであります。

1975(昭和50)年10月6日に、アメリカのワシントン州シアトルで長く牧師をしておられました野地清先生が、この礼拝堂に来られ、朝の礼拝にお話をいただいたのであります。

まず押川先生は、国士でありました。国士というのは、国のためにおのが身をささげ尽くすというような、国を憂う人物ですので、押川先生は国士でありました。

当時、息子さんの押川春浪の追悼会が仙台教会でありました。これは、現在の東一番丁教会の前身であります。大正3年のことだったが、そのときの言葉に「息子と私は、会って互いに話をするときは、いつも祖国日本の現代と将来のことについてであった。自分たちの家の事など一度も話したことはなかった」と。祖国を愛し、憂いた国士でありました。その頃はこのような人たちが、国中にクモの如くたくさんいました。押川先生は、これに之繞(しんにゅう)を掛け、輪を掛けたような人であった。

彼は神信仰に立った本当の愛国者、憂国の徒であったと言われるには、「私は天皇陛下をはじめ、国民全体がキリストを述べ伝える、国民全体がキリスト者となるよう一生懸命にやっている」いかにも、押川先生らしい言葉であります。「押川先生は雄弁家であった」

「犬飼毅、あるいは尾崎行雄にはるかに勝るとも劣らないこの二人は、当時の日本国中で有名な雄弁家、熱弁家であった。魂の奥から吹き上がる雄たけびであり、私たちすべてこの押川先生の話、涙を流して聴いたものでした。

私は50年前、渡米前に芝の増上寺前に押川先生をお訪ねしました。田舎から出て行ったままで、見るもの聞くものすべてが驚くばかり。東京は大した都会で、電車も速く驚いた。しかし押川先生にお会いし、その話を聴いて出てくると、大東京も小さく思えました。押川先生は、そのように大きな力をもった先生でありました。

あるとき仙台教会で、大きな集会がありました。多分、日本キリスト教会の大会であったと思います。

満堂の聴衆でありました。前の方には多くの宣教師たちが並んでいました。私などは後ろに座っていました。押川先生に、どこかに座っているシュネーダー先生を指差し、『数ある宣教師のなかで、日本のために命をささげ尽くしているのはシュネイドル』

こう言ったんですね。シュネーダーをシュネイドルと言ったのです。

『シュネイドル先生、一人だけである』、こう言われました。シュネーダー先生は、日本を自分の国として愛しておられたが、シュネーダー先生が日本を指して言うときには、『わが国』、『わが日本』と言われた」と。

東北学院は昭和11年に創立50周年を祝いました。その席でシュネーダー先生は院長職を辞されたのでありました。

「母校のための募金に奔走された。そして、最後に日本へ旅立たれるとき、サンフランシスコで大きな講演会が開かれ、その最後のところで『私は、私のしかばねを日本に埋めるために日本に帰ります』、こう言われて、これを聴いた聴衆のすべては感涙にむせびました。

私は、愛国心の足りない自分を恥じました。先生の神々しい人格に触れ、大いに感激したのであった。シュネーダー先生こそは、『聖書』に言うところのセイントだと考えている」

「セイントというのは、誤りない完全な人というものではなくて、キリストの霊に輝き、神の祭壇に自分自身、あるいは全人格をささげ尽くしたという意味であります」。

ある日、シュネーダー先生と出村悌三郎先生が、私の祖父のところに来て、長い時間おられたことを記憶している。

シュネーダー先生が学院の教育につぎ、じゅんじゅんと説かれ、祖父が最後に「では1千円ご寄付しましょう」と言ったのを、子ども心に記憶しています。何年の話かわかりませんが、これは当時でかなりの大金であったと思います。

シュネーダー先生は郷里に帰り、「おかゆと梅干しが欲しい」と、かたわらのミセス・シュネーダーに言われた時、そこへミセス・シュネーダーの遠縁にあたる人が来て言うには、「あなたは、どうしてあんな変な日本人と結婚したのか」と。

晩年のシュネーダー先生は白髪でありましたし、長く日本におられて、いろいろな姿が日本人に似るようになったのかもしれませんが、それほど端から見ても、アメリカ人離れて日本人になりきっていたと。このような話をされました。これは非常に興味



明治24年の仙台神学校

深い話であります。

それから、ホーイ先生について。

東北学院が明治19年に仙台神学校としてスタートをして、5年後には、東北学院と名前を変えそしてまた、当時、宮町通りに仙台神学校としての赤レンガの、これまた立派な建物でありました。

この開院式に演説をされた一部を読みますと。

「私たちは、このようにして建てました。またこのように続けていく決心です。私たちは信仰と祈りのうちに、神との交わりのうちに、イエス・キリストへの奉仕のうちに、日本人の人々への奉仕のうちに、引き続きとどまるつもりです。もしも、このことにおいて失敗するならば、この学校のもっとも親しい友たりとも、この学校が礎石の一つだに残されないほどに倒れ、滅びても、異を立てるには及びません」。

このように、このお三方のそれぞれの神髓のお心がよく表れているように思います。

これは月浦先生についてであります。月浦先生はよく「シュネーダーさん」と言われたように記憶いたしますが。「私はシュネーダーさんに教わったとおりに、いまやっているんだ」というようなことであります。

月浦先生は大正6年、東北学院中学部卒業であります。昔も建物はここにあったわけです。卒業を前にして、シュネーダー院長からのお勧めがありました。

「東北学院専門部には、1918年4月より専門部師範科が新しく開設される。それまで1年あるが、それまで山形で宣教しているアンケニー宅で秘書をして働いたらどうだろう」と。

一つには月浦先生の能力を十分に認め、一つには月浦先生が苦学力行の生徒であることをも承知のことであつたらうと思います。師範科という新しく始める授業には、やはり優秀な人物が必要なことは言うまでもありませんが、この時点で遠い将来に向けて、月浦先生が東北学院の重鎮となることを見越

して、あるいは期待をして、このようにお勧めになったのかと。

当時、月浦先生が中学部におられたときの同級生は、多分私の記憶では、27名ほどが仙台教会のなかのバイブルクラスに出席していて、そこで東北学院神学部の学生がいろいろと指導をしていました。

月浦先生は、戦後アメリカからヨーロッパを回られ、帰ってから、私たちにいろいろなお土産話をなさいました。その一部が、当時の東北学院時報に載っていたのであります。

私がアメリカに行った時です。フィラデルフィアにあったミッションの事務所で、ミッションとわが東北学院の古い往復文書を調べていただき、シュネーダー院長がミッションに対し送った年報を見つけました。読んでいるうちに、次のような文章に出くわしました。

“They are christian in there are thinking and living”.

小文字でchristianと書いてあるんですね。先生のお話によりますと、Theyというのは、この場合は学院の卒業生の意味。christian、大文字のThe CHRISTIANとなると、これはキリスト教者、洗礼を受けたクリスチャンという意味になるが、小文字のただchristianとなれば形容詞であって、意味は、卒業生の方々は、思想的にも、生き方やものの考え方においても、キリスト教的であると。すなわち、キリスト教的人生観を持っているのである。たとえ受洗はしていなくても、立派なクリスチャンになっていくともという内容なのですよというような…。

当時は、学校がクリスチャンの生徒を育てるのに、苦勞をしまして、毎年、牧師先生方をお呼びして、伝道集会をやりました。当時向かいの宮城学院も、同じことをやっており、毎年100人を超えるような生徒諸君たちが洗礼を受けていました。わが東北学院は、おそらく30名かそこらであったろうと。

しかし、洗礼こそ受けていなくても、考えや生き方はクリスチャンなのだ、私は本当にそう思うのであります。同窓生の皆さま方がいろいろな理由で、東北学院に学ばれたということは、それだけで本当に皆さま方の人生というのは違うんだと。おそらく東北学院に学ばれなかったならば、今とはだいぶ違うのではないかと。

東北学院に三年、六年、あるいは十年間学ばれるということは、それだけ大きな影響や教えが与えられていることであります。

最後に、シュネーダー先生の愛唱の賛美歌があります。シュネーダー先生のお生まれは1857年。この「JESUS, I LIVE TO THEE」という賛美歌は、1850年につくられました。原作者はリバンド・ヘンリー・ハーボー。これは東北学院と非常に縁の深いペンシ

ルベニア州のランカスターにありました、第一リフォームドチャーチ、第一改革教会と言うのでしょうか、ここの牧師をしていた方であります。

私たちが、東北学院の中学部におりましたころ、シュネーダー先生が朝の礼拝の司会をされるとき、毎回ではありませんが、この賛美歌を、一度歌ったのであります。英語の詞もあります。そのために、この英語の歌詞だけを、このような紙にプリントしたものを、私たちに預けられていたのであります。

そのことを思い出しまして、戦後、榴ヶ岡校舎でも歌うことにしました。ですから、私にとりましても当時を思い出して、非常にうれしく、懐かしい賛美歌であります。プリントされた英語の賛美歌と曲調は違いますが、歌詞の内容は日本語の賛美歌361番。「主にありてぞ われは生くる、われ主に、主われにありてやすし」です。何十年もたっているわけですが、不思議なことに今でも歌えますね。

昭和13年にシュネーダー先生が亡くなられたときに、仙台でお葬式があり、そのプログラムに故人愛唱歌として、この英語の賛美歌が歌われております。これを歌って終わりにしたいと思います。

#### 賛美歌「JESUS, I LIVE TO THEE」

CONSECRATION.  
JESUS, I LIVE TO THEE.  
"Mornington." S. M. (First Tune.)  
REV. HENRY HARRISON, (1817-1867) USA. Garrett Colby Wellesley, Lord Mornington, (1785-1785) 1781.

Je - sus, I live to Thee, The lov - li - est and best;  
My life in Thee, Thy life in me, In Thy blest love I rest A-men.

今日は、みなさまとお別れの会、うれしいような、寂しいようなときではありますけれども、やはり心はうれしいのであります。

われわれの一生は、やがては新しいものも古くなりますし、命あるものも塵に帰る。やむを得ないのであります。しかし、常に望みを持って、必ず神は恵みたまうて、あるべき形でわれわれを導いてくださるという信仰に立ち、東北学院中・高、あるいは、オール学院において、それぞれが今後一層の大きな活躍ができますように、心から祈りたいと思います。

私たちは、この校舎でお会いすることはありませんが、またいずれの日にか会い、共に期待する思いで、この賛美歌を歌いたいと思います。



# 大学祭



## 工学部祭 10月8日～9日

「TRUST(信用)」をテーマに開催され、人気のチャリティバザーや展示発表、芸人ライブ、期間中のオープンキャンパスなど、大勢の人々ににぎわった。今年も天候にも恵まれ、祭りのフィナーレは、夜空を焦がす“大花火”で幕を閉じた。



本格的な秋の季節を迎えて、文化活動などの行事のシーズン到来。東北学院大学では、工学部祭を皮切りに各キャンパスで大学祭が開催された。



## 泉キャンパス祭

10月9日～10日

今年は両日もあいにくの天気となったが、展示企画やミサンガ作り、マジックに挑戦する親子や、地域住民の姿も多く見られ、特に模擬店は例年になく盛況で、威勢の良い呼び込みが祭りの雰囲気を盛り上げていた。





## 六軒丁祭 10月14日～16日

仙台市内一番町通りでの活気あふれる仮装パレードで開幕。今年のステージには楽天マスコットのカラスコも登場した。露天やフリーマーケット、スタンプラリーも好評を博した。お笑い界のトークショーや「よさこい」演舞などもあり、熱気あふれる六軒丁祭となった。





## 学院祭 9月3日～4日

新キャンパスでの初めての文化祭は、「フレッシュ!!」をテーマに開催された。初日は、礼拝堂での開会式後、中学生による弁論大会やMiss・Mr学院などが発表された。一般公開では、音楽部や吹奏楽部の発表や化学部での環境カウンセリング、バザー・古本市などが催され、来場者から好評を博した。



## 榴祭 9月2日～3日

初日は、卒業生の玉田勝吾氏（昭和57年卒・EPICレコードジャパン）による講演会「音楽プロデュース体験記」が行われ、在校生らは同氏の講演に興味深く聞き入っていた。翌日の一般公開では、各クラスによる展示や出店が行われた。

また、初のファッションショーが開催され、個性豊かなファッションに観客からは歓声があがっていた。



## 幼稚園 入園式 4月11日

真新しい園服を着た新入園児の中には、お母さんから離れるのが嫌で泣いてしまう子、幼稚園に行くのが楽しみでここぞとばかりに遊ぼうとする子などで、にぎやかな入園式となった。園児たちは、一人ひとり名前を呼ばれると元気よく返事をして、長島慎二園長から入園を許可された。





第6回ホームカミングデー正門



受付風景



第6回  
ホームカミングデー  
『同窓祭』  
平成17年10月15日(土)





同窓生代表あいさつ  
加藤正人氏（昭和39年卒業生・宮城県副知事）



特別講演会  
講演者：(社)東北経済連合会 常務理事・事務局長  
遠藤芳雄氏（昭和46年卒業生）  
演 題：「東北地方における景気動向の展望」



司式：高橋征士総務部長

## “同窓生と母校の絆を求めて”

6年目を迎えた今年から、同窓生の要望に応じて同窓会全員を対象に開催することとなり、「ホームカミングデー記念式」をはじめ、「懐かしい出会いの夕べ（記念パーティー）」などの諸行事に多くの同窓生らが集まり、終始和やかな歓談の輪が広がっていた。



記念式



記念礼拝 司式・説教者：佐々木哲夫宗教部長  
説教：「地の塩、世の光」



記念礼拝



司会：竹本恵子氏（昭和54年卒業生・フリーアナウンサー）



名誉教授紹介



来賓のあいさつ  
郡和子氏（昭和54年卒業生・衆議院議員）、土井亨氏（昭和56年卒業生・同議員）、中野正志氏（昭和45年卒業生・同議員）



倉松学院長・同窓会長を囲んで記念撮影



和やかな撮影風景



本学応援団・シンフォニックウィンドアンサンブル・チアリーディングチームによる応援歌披露



赤澤昭三理事長の音頭による乾杯



さとう宗幸氏によるミニコンサート



和やかな撮影風景



モッシージャズオーケストラによる演奏



記念抽選会

# 第3回東北学院大学文化講演会

— 青森県で開催 —



昨年、岩手での開催に続く第三回目の「東北学院大学文化講演会2005」が、11月26日にホテル青森(青森市)で開催された。百々幸雄氏(東北大学医学部教授)による「縄文人のルーツと日本列島の人類史」と題した講演が行われ、青森県内の同窓会四支部の協力を得、同窓生、保護者や考古学ファンら約300人が出席した。

講演後は「縄文人の交流と三内丸山遺跡」と題したパネルディスカッションが行われ、詰めかけた多くの来場者の好評を博した。



引き続き、青森県同窓会が盛大に開催された。会は、酌する姿や、名刺交換の姿などで懇親の輪が広がる中、地元で著名な山上進氏(津軽三味線)の“三味の音”で会場のムードが一層盛り上がりを見せた。



各キャンパスの紹介ポスター



司会：大友寿郎氏  
(青森放送東京支社長・昭44卒)





講師：百々幸雄氏  
 (東北大学医学部教授・日本人類学会前会長)  
 演題：「縄文人のルーツと日本列島の人類史」



パネリスト3名：福田友之氏（青森県立郷土館副館長）、百々幸雄氏、佐川正敏氏（本学歴史学科教授）



乾杯の音頭をとる藤村重貴副実行委員長（昭31卒）



齋藤信二総務課長補佐による“東北学院大学逍遙歌”



**青森県同窓会**

- 青森支部
- 八戸支部
- 弘前支部
- 三沢・十和田支部

**青森県TG会**

- 青森県TG会
- みちのく銀行TG会



山上進氏による津軽三味線の演奏



# 2005(平成17)年時事

東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事			
1月	11日	大学推薦入学試験合格発表	3月		編入学試験B日程・転学部・転学科試験合格発表
	14日	幼稚園 造形展(～16日)		16日	幼稚園卒園式
	18日	東北学院高校推薦入学面接・榴ヶ岡高校推薦入学試験		19日	二番丁校地・校舎お別れ礼拝
	19日	大学硬式野球部 星孝典捕手(現読売巨人)、学長訪問・大学課外活動援助に100万円寄付		24日	大学卒業式・学位記授与式
	22日	中学・高校新校舎定礎式・献堂式		25日	中学・高校登校日(新校地・校舎)
	27日	大学体育会平成16年度表彰式		31日	退職者辞令交付式 同窓会館閉館
2月	28日	中学入学試験 幼稚園 もちつき	4月	1日	役職者等辞令交付式／人事異動辞令交付式／新任職員辞令交付式 法学部長に齋藤誠氏が再任 工学部長に遠藤銀朗氏が就任 大学財務部長に高橋克巳氏が就任 大学学務部長に井上義比古氏が就任 大学入試部長に飛田善雄氏が就任 大学就職部長に高橋彌穂氏が就任 中学・高校副校長に渡辺厚氏が就任 中学・高校事務長に佐藤順氏が就任 榴ヶ岡高校副校長に久能隆博氏が就任 幼稚園長に長島慎二氏が再任
	29日	中学入学試験合格発表			文学部歴史学科と教養学部地域構想学科の設置 「次世代育成支援対策推進法」施行
	1日	大学前期日程入学試験(～4日) 榴ヶ岡高校入学試験		4日	寄宿舎入舎式(泉・泉女子・旭ヶ岡)
	3日	高校入学試験 幼稚園 豆まき		5日	大学入学式
	4日	大学外国人留学生特別入学試験		9日	中学・高校入学式／中学・高校入舎式(寄宿舎)／榴ヶ岡高校入学式
	7日	高校入学試験合格発表／榴ヶ岡高校入学試験合格発表		11日	中学・高校開校式／幼稚園入園式
	11日	大学前期日程入学試験・外国人留学生特別入学試験合格発表		14日	「大正デモクラシーと東北学院」調査委員会
	12日	法科大学院B日程入学試験(～13日)		15日	TG十五日会
	15日	高校・榴ヶ岡高校推薦誓約式／幼稚園 保育参観(～16日) 大学産学連携推進センター・宮城県産業技術総合センター IT分野人材育成強化で連携		16日	幼稚園イースター礼拝
	19日	文学部史学科創設40周年・東北文化研究所創設35周年記念学術講演会・祝賀会 幼稚園 昔語り公演		20日	名誉教授称号記授与式
3月	22日	法科大学院B日程入学試験合格発表／大学院春季入学試験(前期・修士課程)	28日	大学体育会入会式／中学・高校奨学会総会	
	23日	大学院春季入学試験(後期課程)	8日	全日本基督教大学柔道大会 本学柔道部 団体3位入賞	
	25日	幼稚園 お別れ会	10日	中学・高校運動会／大学体育会バスケットボール部 韓国学生代表と招待試合開催	
	1日	高校卒業式／榴ヶ岡高校卒業式	11日	大学春季特別伝道礼拝(～12日)	
	3日	大学院春季入学試験合格発表、大学再試験卒業生発表 中学・高校編入学試験 幼稚園 ひな祭り	14日	創立119周年記念式／墓前礼拝 TG十五日会／平成17年度同窓会総会	
	4日	中学・高校終業式、二番丁校地・校舎お別れ式	17日	幼稚園遠足	
	5日	中学・高校編入学試験合格発表	19日	大学体育会結団式／文化団体連合会入会式	
	6日	法科大学院C日程入学試験	21日	大学後援会総会	
	7日	夜間主コース社会人特別入学試験B日程・転学部・転学科試験・編入学試験B日程・再入学試験	28日	第56回対青山学院総合定期戦(～30日)／榴ヶ岡高校奨学会総会	
	8日	大学後期日程入学試験	5月	4日	第54回県高校総体(～6日)
9日	夜間主コース・社会人特別入学試験B日程／編入学試験	11日		市中総体(～13日)	
10日	中学校卒業式	15日		TG十五日会	
15日	法科大学院C日程入学試験合格発表、2年生成績・再入学・復学・研究生発表、大学後期日程入学試験・夜間主コース社会人特別入学試験B日程・	6月			



東北学院に関する主な時事		東北学院に関する主な時事			
6月	17日	第51回対北海学園大学総合定期戦(～19日)／第56回東北地区大学総合体育大会(～7月3日)	8月	入賞 23日 榴ヶ岡高校オープンキャンパス 27日 中学・高校オープンキャンパス／対北海学園大学二部総合定期戦	
	21日	榴ヶ岡高校放送部 第52回NHK杯全国高等学校放送コンテスト宮城大会 アナウンス部門・朗読部門で優良賞、ラジオ制作ドキュメント部門で優秀賞受賞	9月	1日 大学教職員修養会(～2日) 2日 榴ヶ岡“榴祭”(～3日) 3日 中学・高校“学院祭”(～4日)	
	23日	大学院博士前期課程(修士課程)入学特別選考		15日 TG十五日会 29日 大学院秋季入学試験(博士前期・修士課程) 30日 9月期卒業式・学位記授与式	
	28日	ニューサウスウェールズ大学(オーストラリア)との学生交換協定成立		10月	4日 大学秋季特別伝道礼拝(～5日) 6日 大学院秋季入学試験(博士前期・修士課程)合格発表、編入学試験(A日程) 8日 工学部祭(～9日) 9日 大学泉キャンパス祭(～10日) 14日 六軒丁祭(～16日)／TG十五日会／編入学試験(A日程)合格発表 15日 ホームカミングデー(第6回同窓祭) 21日 榴ヶ岡高校第18回強歩大会 31日 宗教改革記念礼拝(中学・高校、榴ヶ岡)
	30日	大学院博士前期課程(修士課程)入学特別選考合格発表	11月		5日 法科大学院A日程入学試験(～6日) 9日 2005年度司法試験に高城晶紀さん(平成15年法学部卒)が合格／中学・高校マラソン大会 10日 推薦入学試験・AO入学試験(A日程)・夜間主コース社会人入学試験日(A日程) 15日 TG十五日会 18日 推薦入学試験・AO入学試験(A日程)・夜間主コース社会人入学試験(A日程)・法科大学院A日程入学試験 合格発表 26日 東北学院大学文化講演会2005 27日 全日本大学女子駅伝対校選手権で本学陸上部が23位 30日 森トラスト株式会社と、中学・高校跡地の全面売却についての売買契約完了
7月	5日	宮城県中学校校内放送コンテスト テレビ番組部門で東北学院中学校放送部が金賞		12月	2日 第17回泉キャンパスクリスマス 14日 大学クリスマス礼拝(～15日) 15日 TG十五日会 16日 第56回公開東北学院クリスマス礼拝／AO入学試験B日程二次選抜・TG推薦入学試験 22日 職員クリスマス／AO入学試験B日程合格発表
	10日	第26回ジュニアオリンピック夏季水泳競技大会で東北学院高校水泳部 安部匠君(100m背泳ぎ第1位、200m背泳ぎ第1位)、三田有輝君(50m背泳ぎ第1位)、武石侑士君(100m平泳ぎ第3位)、佐藤桂輔君(100m自由形第2位、200m自由形第3位)			
	15日	TG十五日会			
	21日	多賀城キャンパス 工学基礎教育センター新築工事起工式			
8月	22日	第52回NHK杯全国高校放送コンテスト全国大会(～24日)ラジオドキュメント部門で、榴ヶ岡高校放送部が優良賞受賞			
	26日	第29回全国高等学校囲碁選手権大会(～28日)で、東北学院高校囲碁部が3年連続団体戦ベスト8			
	4日	第4回全国高等学校合気道演武大会で榴ヶ岡高校が奨励賞受賞			
	6日	オープンキャンパス(泉)／(多賀城～7日) 第2回全国中学生弓道大会(～7日)で、東北学院中学校弓道部団体で3位入賞 個人でも氏家昂大君が3位入賞を果たす			
	8日	対青山学院大学二部交流定期戦			
	10日	第10回全国学生対抗カート選手権大会(～11日)で、工学部カート部 機械創成工学科4年 開発正隆さんがRKクラスで優勝を飾る。TIAクラスでは、小野寺壮大さん(同学科2年)が6位に入る。本学 総合第4位の戦績を残す。			
	19日	第57回全日本大学準硬式野球選手権大会(～24日・岡山県)において、全日本選抜チームのメンバーに、本学体育会準硬式野球部の永田明仁(経営学科4年)さんが選抜			
	20日	第13回全国中学生空手道選手権大会(～21日)で、東北学院中学2年 浅井太郎君が個人組手第5位			

# 東北学院資料室規程

## (設置および名称)

第1条 本院に、東北学院資料室(以下「資料室」という。)を置く。

## (目的)

第2条 資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

## (事業)

第3条 資料室は、第2条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

- 一 資料の収集、整理、および保存に関すること。
- 二 資料に関係する刊行物の編集および出版に関すること。
- 三 資料の展示および公開に関すること。
- 四 資料の閲覧および貸出に関すること。
- 五 資料に関係する情報の提供に関すること。
- 六 その他、必要と認められる事業に関すること。

## (運営委員会の設置)

第4条 資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会(以下「運営委員会」という。)を設ける。

## (運営委員会の構成)

第5条 運営委員会は、次の者をもって構成する。

- 一 学院長
  - 二 総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長
  - 三 中学・高等学校副校長1名、榴ヶ岡高等学校副校長、中学・高等学校事務長、榴ヶ岡高等学校事務長、幼稚園教頭
  - 四 法人事務局長、庶務部長、庶務課長、広報課長
- 2 運営委員会は学院長が招集しその議長となる。
  - 3 運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。
  - 4 運営委員会の事務は、広報課が行う。

## (資料室の管理・事務)

第6条 資料室の管理・事務は、広報課がこれを行う。

## (規則の改廃)

第7条 本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

## 附則

本規程は、2001(平成13)年4月1日から施行する。

## 附則

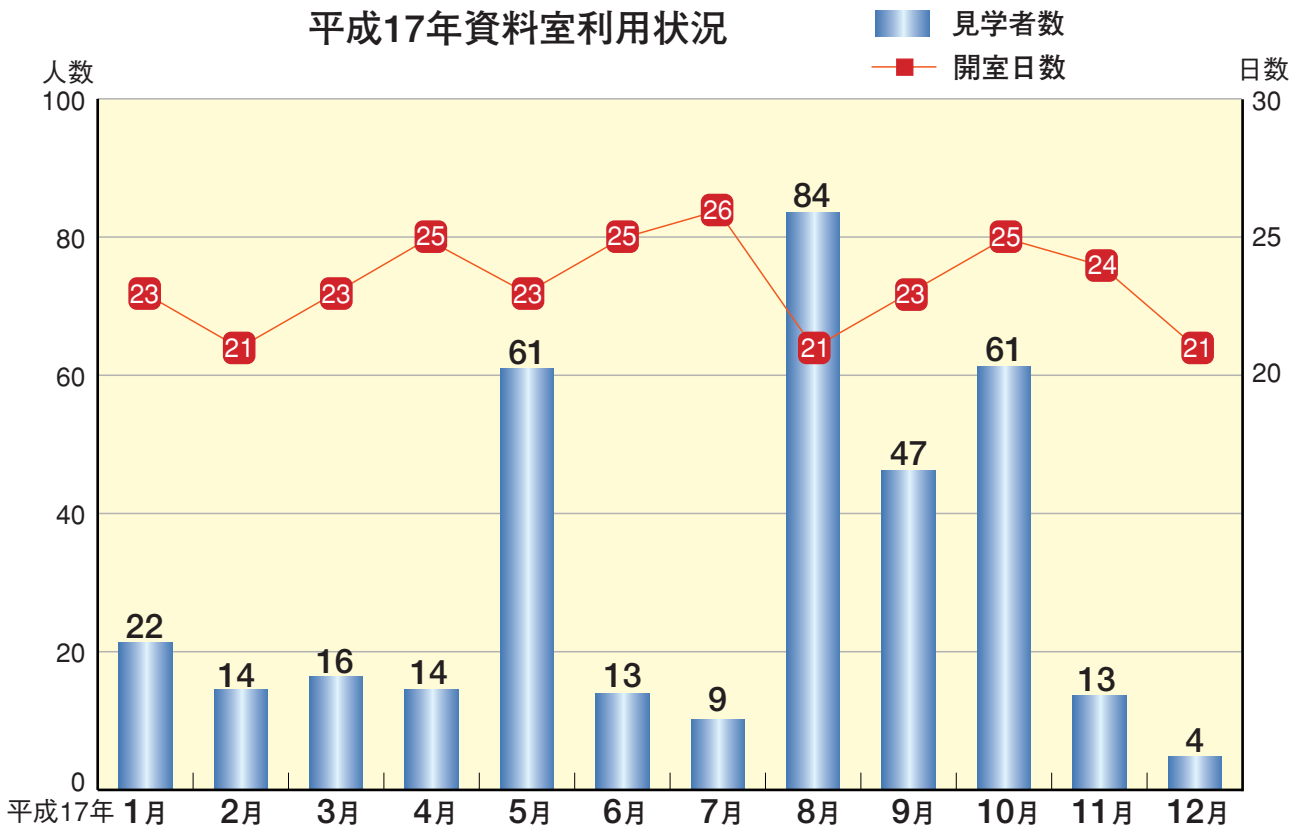
本規程は、2003(平成15)年4月1日から一部改正施行する。

# 平成17年資料室来室状況

2005（平成17）年

- 2月15日 誓約式参列者父母（6名）
- 5月19日 塩釜高校教員と生徒（29名）
- 5月21日 日本民事訴訟法学会（26名）
- 6月16日 同窓生 斉藤陽子さんご両親、  
「陽子さんを救う会」事務局長 今野勝男さん
- 8月 3日 荒町新鮮組主催 歴史探訪ツアー参加者（60名）
- 8月25日 映画製作会社「葵プロモーション」（13名）
- 9月20日 志田郡成人大学（38名）
- 10月 7日 キリスト教文化学会参加者（3名）
- 10月15日 ホームカミングデー（約15名）
- 10月20日 同窓生 フリーアナウンサー 小梁川道子さんと  
富谷高校教員・生徒（13名）
- 10月31日 明治学院大学歴史資料館関係者（4名）

平成17年資料室利用状況



## 東北学院資料室運営委員会

委員長	学院長	倉松	功
委員	副学長	関谷	登
	宗教部長	佐々木	哲夫
	総務部長	高橋	征士
	総務部次長	菅野	健
	中学・高等学校副校長	渡邊	直道
	中学・高等学校事務長	佐藤	順
	榴ヶ岡高等学校副校長	久能	隆博
	榴ヶ岡高等学校事務長	高橋	正博
	幼稚園教頭	多田	征子
	法人事務局長	飯土井	公洋
	庶務部長	大童	敬郎
	広報課長	吉田	知致



### 資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

#### 開室時間

#### 授業期間中

月～金 10:30～16:00

但し、昼休み時間(12:40～13:40まで)を除きます。

土 10:30～12:00

(祝祭日はお休みいたします。)

#### 長期休暇(春休み・夏休み・冬休み)中

月～金 10:00～15:30

但し、昼休み時間(12:40～13:40まで)を除きます。

(土・祝祭日はお休みいたします。)



### 広報課

広報課長	吉田	知致
広報課長補佐	久保田	博
	早坂	友行
	渡辺	洋樹
	宮崎	英明
	佐藤	智香子

発行日 2005(平成17)年12月31日

編集 東北学院資料室運営委員会

発行 学校法人 東北学院

〒980-8511

仙台市青葉区土樋一丁目3番1号

TEL.022-264-6423 FAX.022-264-6478

<http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>

印刷 東北堂印刷株式会社